

「大人の世紀」か？

津守 真



大人の世紀はいつ始まるのか？

前号に述べたエレン・ケイは、二十世紀を「児童の世紀」と提唱した。

今世紀が生んだ著名な心理学者E・H・エリクソンは、人間の生涯の発達を課題とし、一九五〇年には、名著『幼児期と社会』（仁科弥生訳、みすず書房）で乳児期から老年期にいたるまでの人の発達を八つの段階に分けて各時期の発達の危機と、そこで獲得される徳を明瞭に示した。彼は一九〇二年に生まれてその晩年、一九八二年に『ライフサイクル—その完結』（村瀬孝雄、近藤邦夫訳、みすず書房）を書いて、

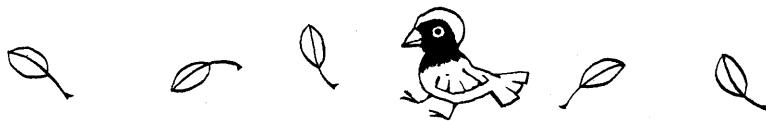


数年前に亡くなつた。二十世紀を生き抜いた人間研究者といえる。彼は子どもの研究のみでなく、ルター、ガンジーなどの伝記研究などでも知られている。晩年の伝記研究にアメリカ第三代大統領、ジェファソンを主題とした。『歴史のなかのアイデンティティ』一九七三年 ジェファソン記念講演 (Dimensions of a New Identity : The 1973 Jefferson Lectures, New York : W. W. Norton 1979) がある。その最後の章は、「大人の世紀か?」という表題をつけて、彼は次のように言つてゐる。

「私が若かったとき、児童の世紀といふ」とがいわれた。それは終わつたのか、それは静かにこの時代のものとなつたのだと私は考えたい。それ以来、青年の世紀ともいふべき時期を通過した。しかし大人の世紀はいつ始まるのか?」と。児童の世紀を生きたE・H・エリクソンはどのような意味で大人の世紀と書つたのか。

個人の伝記研究と歴史

ジェファソンはアメリカの独立宣言を起草し、建国時代のアメリカをつくった政治家である。E・H・エリクソンは一人の人の伝記研究—ケーススタディーを手がけるにあたつて、「ジェファソンは研究の対象なのではない」と明言し、人間を考えための「導きの光 (guiding spirit)」なのだと彼の伝記研究の立場を述べる。エリクソンによれば、ひとりの人の生涯の発達は、これも一回限りのその時代の歴史と切り離し難く織り成されており、歴史をつくる重要な要素である。」のことはエリクソン



矛盾を抱えながらの自我

エリクソンは、ジェファーソンの伝記研究にあたり、とくに二つの資料を用いる。ひとつは『ヴァージニア州に関するノート』であり、もうひとつはジェファーソンが大統領時代に毎夜四か国語の新訳聖書を比較しながら著作をすすめたという『福音書の注解』である。前者はジェファーソン三十八歳のときの著作で、彼が住んでいたヴァージニア州の地理学的調査と統計資料である。彼はその土地の小高い丘「モンティエロ」に、真に古典的貴族風の、しかもアメリカの自然と融合した建築をつくった。父親はヨーロッパの生粹の貴族の血を引いており、また労働と教育による独立と自己向上の人であつた。ここにも矛盾の共存を見る。

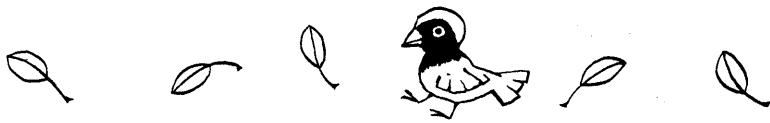
ジェファーソンは政治家であるが、自らを農民と自認したヒューマニストであった。彼はヨーロッパの文化と価値を新大陸に移植しようとしたがら、過去の父祖の国への忠誠心を捨て、新大陸に新しいアイデンティティを求めた。個人的な面からいうならば、父親譲りの調査好きであり、また建築にすぐれた興味をもつ多面な人であつた。彼は人間は平等であるという固い理念はもちながら、奴隸制度を容認するという矛盾を内にはらんでいた。



E・H・エリクソン自身、一九三〇年代のなればに、ナチの迫害から逃れてアメリカに亡命したユダヤ人学者であり、移民である。アイデンティティは最後まで彼の課題であったので、ジェファソン研究にあたって、古いアイデンティティの上に新しいアイデンティティをつくることを主題としたのであろう。アイデンティティは一度つくられればそれで変わらないというものではない。それは人生の節目で新たにされねばならない。「共同の未来への自由と、過去の絆からの自由」がジェファソンの課題であった。ジェファソンは多面の人だったが常に自分自身であった。エリクソンは老年期の発達の危機を統合というが、これはひとつにまとめあげるというのではなく、矛盾を抱えたまま持ちこたえる自我を言うのではないだらうか。

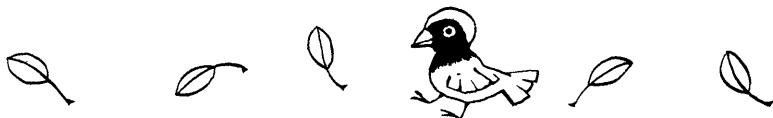
個人のアイデンティティと共同体へのアイデンティティ

エリクソンはアイデンティティを定義して次のように言う。「アイデンティティは人の成長と発達を通じて同じ自分自身であるという感覚と同時に、歴史と未来をもつたコミュニティ、その神話との一体感の感覚である」と。アイデンティティは個人の生涯の問題であるとともに、共同体の問題である。仲間関係での共同体に対する忠誠は青年期の発達の課題であるが、それは成人期にもちこされる。自分の直接に所属するグループにだけの忠誠心となると、対立するグループには敵対心をもつことになる。それは青年のみでなく、歴史の上でも何度も起つたことであった。エリクソンは



この書物を通して「歴史のあらゆる時代を通じて自分自身の種族が神に与えられた優越性をもつ」という体系的幻想である偽種族化（pseudo speciation）」を主テーマとする。「偽（pseudo）」というのは「共通の種族としての人間の認識に立つのではなく、異なる民族、国家、信条、階級、政党など小さなグループに対するアイデンティティに固執し、自分たちが選ばれた種族であると考え、とくに危機の時に、民族特有の偏見ある主張のためにすべての人間的な知識、論理、倫理を犠牲にする」とである。現代の民族主義もこれに属する。

「ダーウィンの「種の起源」の提唱の後に、われわれはホロコーストの時代を迎え、ひとりの人種が他よりも優れているのみでなく最も進歩したテクノロジーによって他を絶滅する権利をもつという時代を体験したのであった」とエリクソンが述べるとき、ユダヤ人学者としての彼の痛切な思いが伝わってくる。そして更に現代の世界について彼は次のように述べる。「いまやいかなる国も、超能力の武器を勝手に使うことは許されず（偶発的な虐殺であろうと計画的爆撃であろうと）、無用な民族を絶滅させることはできない。われわれは自分たち自身に對して致命的な危険な種族となつた」と。このことは地球規模の世界となつた現代にとくにそうである。ジェファソンも広い世界のことを考えた。しかしジェファソンは歩いて行ける範囲を理想実現の世界の範囲と考えた。現代はそれが宇宙の果てにまで及んでいる。しかも現代の巨大なネットワークの中で人々は孤立している。「それを救済するには、周縁と力動的に関



連する、内に中心をもつた新しい人を必要としている。勤勉と創造的適応力の中心をもつた人間こそがこの国で必要とされている」とエリクソンは言う。共同のアイデンティティと個人のアイデンティティとは共にある。

「アメリカンドリーム、永遠の新しさの共同夢、それは大文字のDで呼ぶ個人の夜の夢なのか。夜の夢は前日の疲労を回復し新しいエネルギーを充填するだけでなくまさに夢見るのである。われわれの個的な古代的な過去のある部分に戻ること、前の日によって引き起こされた疑惑と、過去を呼び起こすシンボルであるイメージを夢見るのである。目覚めてわれわれは、自分がどこにだれといるかだけでなく、自分は誰なのかということについて自分を立て直す。そしてすべての人は、鏡のなかの自分に出会い、範囲を限定し、四隅を限り、新しくその日に向かう準備をなし、その日に召命を受けて労働するのに備える。ここでは、共同のヴィジョンは、われわれの役割を記す衣服の役だけでなく、行動のスタイルにし、その日一日をささえる高揚した実現に至らせる背景として役立つ」。

「TAKE CARE」——育てる人になりなさい

私共が一日をはじめる朝毎に、新しさの感覚を思い起こすことが必要である。子どもは人生の始まりである。やがて青年になり、大人になり、そして老人になる。人生のいろいろの段階を経る」と、その経験の中での矛盾をひとつ的人生の全体の中に

おさめて、再び新たなアイデンティティを創りなおすことが必要になる。これはエリクソンの言う人間の生涯の最終段階の課題である。

エリクソンは「大人の世紀か?」という最後の章で次のように述べる。「子どもがなるもの、なってほしいと願うもの、なってきたものを知らなければ、子どもと青年についての知識は断片的にとどまる」「大人は彼等自身が前の世代から引き継いだ未成熟さを次の世代に引き継がないように互いに助けることを学ぶように」と。育てる人になることが大人になることである。子どもの数が減少したから大人の世紀になるのではない。大人の世紀は、育てることのできる大人への問い合わせじまるのであると私は考える。そして最後にエリクソンは「TAKE CARE」という挨拶で結ぶ。彼は成人期に結実する徳を英語でCARE(世話、育てる)という語を用いる。現代ではこの語は人と別れるときの通常の挨拶の語でもある。もともといの語は、「苦労する、気遣う」という意味である。大人の世紀は、成熟した成人として気を遣い、苦労して人間を育てる時代と考えれば、児童の世紀と連続である。(文中引用は私訳)

(愛育養護学校)

